

山岡鐵舟年譜

- 天保 七年(一八三六) 一歳 六月十日 御藏奉行 小野朝右衛門の四男として江戸に生まれる
弘化 元年(一八四四) 九歳 劍の師 久須美閑適齋について 眞影流を学ぶ
弘化 二年(一八四五) 一〇歳 七月一日 父君 飛彈郡代に転任 鐵舟父母に同行する
嘉永 三年(一八五〇) 一五歳 書道の師 岩佐一亭より 入木道五十二世を譲られ 一楽齋と号す
嘉永 四年(一八五二) 一六歳 九月二十五日 母君 高山陣屋で病没す
嘉永 五年(一八五三) 一七歳 十二月 父君の招請により 劍の師 北辰一刀流 井上清虎 高山に到着
閏二月 父君 高山陣屋で病没す
七月 五人の弟達を連れて 江戸に帰着
安政 元年(一八五四) 一九歳 山岡静山に槍術を学ぶ
安政 二年(一八五五) 二〇歳 静山 急死のあと 山岡家の養子となり 静山の妹 英子と結婚
安政 三年(一八五六) 二一歳 幕府講武所の劍術世話心得となる
安政 六年(一八五九) 二四歳 終日立切二百面 七日間立切千四百面を行う
万延 元年(一八六〇) 二五歳 清河八郎 他と「虎尾の会」を結成し 尊皇攘夷党を起す
文久 二年(一八六二) 二七歳 上席浪士取締役となる
文久 三年(一八六三) 二八歳 將軍 家茂の先供として 浪士組を率いて 上洛するも 間もなく 江戸に帰る
元治 元年(一八六四) 二九歳 浅利又七郎 義明に劍を学ぶ
慶応 四年(一八六八) 三三歳 三月 慶喜から直接の命を受け 東征軍大参謀 西郷隆盛と駿府で談判 江戸城無血開城への道を開き 徳川家の安泰も約す
明治 二年(一八六九) 三四歳 静岡藩権大参事に任ぜられる
明治 四年(一八七二) 三六歳 十一月 茨城県参事となる
明治 五年(一八七三) 三七歳 十二月 伊万里県(現佐賀県) 権令となる
明治 六年(一八七三) 三八歳 六月 十年の期限を約し 明治天皇の侍従となる
明治 七年(一八七四) 三九歳 三島龍沢寺の星定和尚について 参弾する
明治 八年(一八七五) 四〇歳 五月 皇居炎上 淀橋の邸より 駆けつける
明治 九年(一八七六) 四一歳 宮内少丞に任ぜられる
明治 十一年(一八七八) 四三歳 三月 西郷隆盛を説得のため 内勅を奉じ 九州に差遣せらる
明治 十二年(一八八〇) 四五歳 八月 竹橋騒動に際し 御座所を守護する
明治 十三年(一八八二) 四七歳 九月 明治天皇の北陸・東海地方御巡幸に 供奉する
明治 十四年(一八八三) 四八歳 十月 越中 国泰寺 越叟和尚と相識る
明治 十五年(一八八四) 四九歳 三月 三十日 払暁 大悟徹底 滴水和尚の印可を受ける
明治 十六年(一八八五) 五〇歳 劍の道も無敵の極処に達し 無刀流を開く
明治 十七年(一八八六) 五一歳 三月 岩倉具視の依頼で「慶応戊辰三月駿府大総督府」^{ニ於テ} 西郷隆盛氏「談判筆記」を書く
明治 十八年(一八八七) 五二歳 六月 宮内省を辞任 引き続き 恩命により 宮内省御用掛を仰付けられる
明治 十九年(一八八八) 五三歳 普門山 全生庵を東京谷中に 建立
明治 二十年(一八八九) 五四歳 清水に 補陀洛山 鐵舟禪寺(元久能寺)の 建立を 発願
明治 二十一年(一八九〇) 五五歳 白隠禪師の 国師号 宣下に 尽力 五月に 宣下される
明治 二十二年(一八九一) 五六歳 五月 勲功により 華族に 列せられ 子爵を 授けられる
明治 二十三年(一八九二) 五七歳 七月 十九日 午前九時十五分 坐禅のまま 大往生を 遂ぐ
明治 二十四年(一八九三) 五八歳 七月 二十二日 東京谷中の 全生庵に 埋葬される